

尚人が夏美の背中に張り付いた。

「いれるよ、ママ」

ズルリと肉棒が潜り込んでくる。

「あッ…あんツ…尚人…」

背筋を灼く快美に声が漏れた。尚人がゆっくりと突き上げてくる。まるで別人のようなふてぶてしい程の余裕だ。

「気持ちいいかい、ママ」

「い…いいわ…ひッ」

ネグリジェが引き下ろされ、桜色に染まった上半身が露わになる。尚人が背中に覆いかぶさってきた。乳房が揉まれ、首筋や耳朶に舌が這う。

「好きだよ…ママ…」

身体の芯がキュッと疼く。前後の穴がヒクヒクと締まるのが分かる。息子の言葉に一層夏美は昂った。

（こんな恐ろしい事しているのに…）

恐怖と絶望と、そして身体が溶けてしまいそうな快美が夏美を悩乱の渦に突き落とす。

「尚人…ねえ…尚人…ママ…どうすればいいの…」

テーブルの脚がギシギシと音を立てる。溢れ出た蜜が二人の脚を伝い床を濡らす。朝日の差し込むダイニングキッチンで我が子に肛門を犯されるなど淫夢の中にいるようだ。

「いく時はいくというんだよ、ママ」

「いや…恥かしい…」

「言えないならおあずけだ」

尚人はいきなり肉棒を引き抜いた。

「いやッ…そんな…尚人…お願いッ」

快楽を中断され夏美は切なげに腰をうねらせる。

「ねえ…尚人…ねえったら…」

「いくと言うかい」

「ああ…許して…」

「いつまで我慢できるかな」

尚人の指が潜り込んできた。

「ねえ…指じゃいや…ねえ…尚人」

いつの間にこんなやり方を覚えたのか。我が子の手管に夏美は翻弄された。

「お願い…言うわ…言います…だから…ねえ…」

罪の意識などどこかに飛んでいた。ただこの堪え難い搔痒感を何とかして欲しかった。

「じゃあしてあげる」

再び尚人が押し入ってくる。我が子の肉…。幼児の頃は小指程の大きさしかなかった。それが今自分を支配している。倒錯的な悦びが夏美を満たす。

「あひいッ…尚人…尚人…いいわ…気持ち良くて…ママ…狂っちゃう…」

夏美はすすり泣き、よがり声をあげ狂乱した。愛する息子の肉棒に自分の直腸を蹂躪される、その異常さが夏美を一層狂わせた。尚人の腰の動きが荒々しくなる。

「尚人…ちょうだい…ママの…お尻に…」

絶頂の予感に夏美は恍惚となる。

「ママ…ママッ」

「ああ…尚人ッ…いくわ…ママ…お尻でいきますッ」

熱い樹液が迸った。

「ひいいいッ」

テーブルの縁をギュッと握り締め夏美は身体を痙攣させた。断続的に射出される精液が腸壁を洗う。尚人は夏美の背中にペタリと張り付き背後から首筋に腕を絡めると、最後の一滴まで母の体内に絞り出した。

尚人が離れると夏美はズルズルとその場に崩れ落ちた。テーブルの脚にしがみついたまま、荒い息を吐き絶頂の余韻にヒクヒクと身体を震わせる。ネグリジェはクシャクシャに丸まって腰にからみついているだけで、むき出しの乳房や四肢が眩しい。菊蕾から滲み出した白濁が床を濡らしていた。